［実践報告］

スポーツ戦術プロジェクト研究会報告 2017Ⅱ

小澤　翔*1・栗山雅倫*1・陸川　章*1・小山孟志*2・後藤太郎*1

小西康仁*3・植村隆志*1・八百和則*1・西村一帆*3

藤井壮浩*1・嘉数陽介*4・田村修治*1・下山　唯*5

An activity report of Sports tactics project 2017 part Ⅱ

by

Sho Ozawa, Masamichi Kuriyama, Akira Rikukawa, Takeshi Koyama, Taro Goto,
Yasuhito Konishi, Takashi Uemura, Kazunori Yao, Kazuho Nishimura, Masahiro Fujii,
Yosuke Kakazu, Syuji Tamura and Yui Simoyama

Abstract

As reported in the Bulletin School of Physical Education 2012, Sports Tatics Project has been help by instructors of the department of Competitive Sports and other motivated instructors since 2004. The purpose of the project is to discuss coaching methods from different perspectives and to correct knowledge of sport tactical matters by exchanging opinions among project members.

The following is a report of the project activities in the Autumn of 2017.

Ⅰ　はじめに

2004 年，東海大学体育学部競技スポーツ学科の教員を中心に戦術をキーワードとする「スポーツ戦術プロジェクト研究会」は発足された [1)]。この研究会では，戦術の話題もさることながら，チームの運営，コーチングの詳細，種目間連携など様々な切り口で意見交換がなされてきた。新たなメンバーも加わることで，更なる競技力向上だけでなく、新たなコーチングを確立させることに繋がる

＊1　東海大学体育学部競技スポーツ学科　＊2　東海大学スポーツ医科学研究所　＊3　東海大学体育学部非常勤
＊4　公益財団法人日本ハンドボール協会　＊5　スポーツ教育センタースポーツ課

と考えられる。

以下に，2017 年後期に行われた発表内容を示した。

Ⅱ　発表内容概要

1. 2017 年台北ユニバーシアード大会 バスケットボール競技報告

陸川　章・岩部　大輝

1）はじめに

現在，バスケットボールにおいてユニバーシアード大会は世界各国から優秀な若手選手が集まる国際ゲームであり，NBA やユーロリーグ，各国代表となる逸材が集結している大会であると言っても過言ではない。その中で，2017 年 8 月に開催された台北ユニバーシアード大会にて，男子バスケットボールチームヘッドコーチとして挑んだ２年間の取り組み，結果を報告する。

2）ユニバーシアードに向けた二ケ年計画

(1) 2016 Spring Camp

世界の高さ，大きさと対等に戦うためには体力，走力，フィジカルの強化が大前提と考え，2016 年 2 月～3 月にかけ，スプリングキャンプを 3 回（2 泊 3 日）行った。早朝 6 時よりインターバルトレーニング（400m×3 本，200m×10 本），午前中にスキルアップ＆ウェイトトレーニング，午後チーム練習を中心に選手の意識改革を図りながら強化を行った。候補選手として，大学生を中心に高校 3 年生 11 名を含む総勢 45 人を選考し，U20 および U22 の二つのグループに分け，全日本大学バスケットボール連盟（以下 日学）強化委員がそれぞれの担当を決め，スキルアップを図り，総合力を高めた。

(2) 2016 年の強化試合

5 月に日韓学生李相佰盃（3 試合），6 月～7 月にかけてアジア・パシフィック・ユニバーシティ・バスケットボール・チェレンジ（4 試合）を行ったが，怪我人等の影響もあり，結果はまだまだであった。結果は下記の通り。

2016 李相佰盃

JPN 48 ● - ○ 106 KOR
JPN 51 ● - ○ 79 KOR
JPN 67 ● - ○ 79 KOR

2016 Asia Pacific University Basketball Challenge

JPN 66 ● - ○ 69 RUS
JPN 80 ● - ○ 82 KOR-B
JPN 72 ○ - ● 69 TPE

(3) 2017 Spring Camp

今回の重点強化策の中で一番功を奏したのは，公益財団法人 日本バスケットボール協会（以下 JBA） 技術委員会アドバイザー兼日本代表暫定ヘッドコーチ(2017 年 2 月当時) ルカ・パヴィチェヴィッチ氏によるスプリングキャンプであった。2017 年 2 月 20 日から 4 泊 5 日の強化キャンプを 3 回行い，世界基準の戦術（ピックゲーム），練習の組み立て方，考え方（Intensity，Aggressiveness，Solidness）を選手と共にコーチ陣も大いに学ぶことができた。

内容として，第 1 回スプリングキャンプ（2 月 20 日～24 日）は『日本代表は強く激しいディフェンスから，速いファーストブレイクを出し，正確に決める』をテーマにディフェンスファンダメンタル，ハンディキャップにおけるトランジションディフェンス，ドライブに対するストップ＆ローテーション，ファーストブレイクの出し方，アウトナンバーの攻め方を中心に行った。

第 2 回スプリングキャンプ（2 月 27 日～3 月 3 日）は『勝つ文化を創る』をテーマにダイアモンドモーションオフェンス，ピックゲームとオフェンス戦術を中心にインテンシティ高く取り組んだ。パス及びボールムーブメントの重要性を大いに理解した。また，第 1 回キャンプに続き，ディフェンスファンダメンタル，トランジションディフェンス，ストップ・ザ・ドライブとチームディフェンスの強化も行った。

第 3 回スプリングキャンプ（3 月 6 日～10 日）は『どの海外のチームより，規律正しく生きている文化があるので，日本は完璧なディフェンスをする。また，日本は世界の中で最高のレベルではないかもしれないが，Great Intensity，Great Aggressiveness，Great Solidness，そしてスピードボールムーブメントとハイレベルなバスケット

をしていけば必ず勝つチャンスが生まれる』と信じ，ショートタイムでのピックゲーム，ゾーンオフェンス，アウトバウンズからのオフェンス，そしてさまざまなタイプのスクリーンに対するチームディフェンスを強化した。

(4) Spring Camp 後の韓国遠征

選手選考においては，上記のスプリングキャンプに候補選手 40 名を集め，2 グループに分け，練習を見ながら入れ替えを繰り返しキャンプ毎に人数を絞っていった。最終的に 14 名を選考し，強化キャンプの成果を試すべく，3 月中旬に韓国遠征を行い，KBL（韓国プロリーグ）チームと 5 試合行った。KBL チームは主力（外国人選手を含むスタートメンバー）を出していなかったが，3 勝 2 敗と勝ち越せたことは大いに自信になったと同時に進むべき道が明確になったと感じた。

(5) 2017 李相佰盃

2017 年 5 月に東京にて開催される日韓学生李相佰盃に向け，4 月に 3 回のキャンプを行い，再度ルカコーチから教わった戦術を確認，強化し本戦に臨んだ。結果は 27 年ぶりとなる 3 連勝で幕を閉じ，8 月のユニバーシアードに向け，幸先のよいスタートを切ることができた。

JPN 74 ○ - ● 70 KOR
JPN 80 ○ - ● 77 KOR
JPN 93 ○ - ● 84 KOR

(6) 2017 William Jones Cup

2017 年 6 月中旬から B リーグ(プロ)選手 4 名，アメリカの大学に進学している選手 1 名を招集し，3 回強化キャンプを行った。その後 7 月中旬から下旬にかけて，台北にて開催されたウィリアム・ジョーンズカップに参戦し，カナダ，リトアニアをはじめアジア地区各国代表と 9 連戦行った。結果は 2 勝 7 敗と厳しいものであったが，新メンバーが加わってのゲームであり，お互いの特徴を理解するよい機会となった。

JPN 86 ● - ○ 65 ROC-A
JPN 70 ● - ○ 79 IRQ
JPN 67 ● - ○ 94 LTU
JPN 85 ● - ○ 100 PHI
JPN 91 ○ - ● 86 ROC-B
JPN 81 ● - ○ 101 KOR
JPN 60 ● - ○ 108 CAN
JPN 77 ○ - ● 61 IND

(7) 2017 Asia Pacific University Basketball Challenge

8 月に入り，NTC にて最後の強化キャンプを行い，台北ユニバーシアード本大会前に韓国で行われたアジア･パシフィック・ユニバーシティ・バスケットボール・チャレンジに参加した。結果はフィリピン，韓国，ロシアを倒し，小さな大会とは言え初優勝を飾ることができた.

JPN 83 ○ - ● 73 PHI
JPN 60 ● - ○ 74 ROC
JPN 81 ○ - ● 77 KOR
JPN 48 ● - ○ 61 RUS
JPN 83 ○ - ● 77 RUS

3) 2017 Universiade 本大会

8/20　予選リーグ　日本 ● 48-94 ○ フィンランド
8/21　予選リーグ　日本 ○ 86-82 ● 香港
8/22　予選リーグ　日本 ● 59-97 ○ ドイツ
8/24　予戦リーグ　日本 ● 76-90 ○ カナダ
8/25　予選リーグ　日本 ● 63-73 ○ ノルウェー

※予選リーグ　1 勝 4 敗　グループ 5 位 → 17~24 位決定戦

8/27　下位トーナメント　日本 ○ 84-80 ● 韓国
8/28　下位トーナメント　日本 ● 78-84 ○ ロシア
8/29　下位トーナメント　日本 ● 75-87 ○ ルーマニア

※最終順位　20 位

4) 総括

【継続すべきこと】

・海外遠征（ヨーロッパもしくはオーストラリアでの経験が必要）

【技術・戦術について】

・フルコートプレッシャーディフェンス

・コンタクトボックスアウトの徹底
・ショットインブレイク＆ドライブリアクト
・アーリーピックゲーム
・ダイアモンドモーションオフェンス
【オフェンス】
・フリースローの確率アップ
・フィニッシュ力：イージーレイアップを決め切る（高さを意識しすぎ外していた）
・ノーマークシュート：２ポイント，３ポイント問わず決めるシュート力 アウトナンバーの決定力
・プレッシャーに対するエントリー（ドリブル，パス&キャッチ），プレーの遂行
・ピックゲームの技術力，判断力，展開力をチーム全員が理解し，遂行する。
【ディフェンス】
・１対１のディフェンス強化（１アームプレッシャー，押し込まれないフィジカル）
・クローズアウト１対１（クローズアウト技術の向上：ポジショニング，スタンス）
・コンタクトディナイ（バックカットされるシーンが多かった）
・ストップ・ドライブ＆スイッチローテーション
・スクリーンディフェンス（特にピック対応のバリエーションを増やす）
・ボックスアウト＆リバウンド・ルーズ（オフェンスリバウンドからのセカンドチャンスポイントを確実に減らさなければならない）

小さな積み重ねを続けることが大きな成功を手にできると信じる。良きところは大いに伸ばし，改善すべき点に時間をかけ，精度を上げていくことを継続していく所存である。

素晴らしい経験をさせていただいた全ての関係者に感謝したい。

2. 2017 全日本インカレ報告

小西　康仁

1）はじめに

今日の体操競技は、2006 年のルール改定により、演技の難しさを表すＤスコアと、演技の美しさを表すＥスコアの合計で表示されるようになった。そのため選手は高難度の技を実施しつつ、その技を正確に美しく実施しなければならなくなった。

2016 年の「全日本学生体操競技選手権大会（以下、全日本インカレとする）」では、本学体操競技部が見事、２部団体総合優勝を果たし、8 年ぶりの１部昇格となった。2017 年度全日本インカレでも、その勢いを衰えさせず、１部に残留することは勿論のこと、１部で上位入賞を果たすために以下の目標を掲げた。

(1) 全日本インカレ団体総合８位以内

まず 1 部に残留するためには、団体総合 10 位以内という結果でなければならない。全日本インカレの目標を男子主将と話し合い「団体総合８位以内」を目指し、先に続く全日本体操競技団体選手権大会への出場権を獲得することを目標とした。

(2) 高いＤスコアで美しい演技で臨む

1 部校にはオリンピック選手を多く輩出している順天堂大学や日本体育大学などがおり、その中で戦うためには高いＥスコアを維持しつつ、演技の難しさであるＤスコアを高めなければならない。2017 年度はチャレンジャーとして、高いＤスコアで美しい演技で臨むことを目標にした。

2）結果

2017 年度全日本インカレの１部団体総合の結果は、以下の通りである。

1 位	順天堂大学	422.450 点
2 位	日本体育大学	419.350 点
3 位	鹿屋体育大学	410.400 点
4 位	筑波大学	408.200 点
5 位	福岡大学	405.700 点
6 位	仙台大学	400.750 点
7 位	早稲田大学	400.450 点
8 位	日本大学	398.050 点
9 位	慶應義塾大学	393.350 点
10 位	東海大学	392.700 点
11 位	国士舘大学	383.700 点
12 位	九州共立大学	384.600 点

本学体操競技部は１部団体総合で 12 位中 10 位という結果であった。

3）今後の方針

試合の結果から、１部に残留することができた

ことは、個人の競技レベルがいままでよりも高くなったことが一要因であると考えられる。しかし、当初の目標であった団体総合８位以内は達成できなかった。この要因としては、チームとして一致団結することができなかったことが考えられる。チームで一致団結することができなくなってしまうことで、今まで以上にメンバー同士のコミュニケーションが希薄になってしまい、自分の演技に集中してしまい、ミスをカバーすることができなくなってしまったのではないかと考えられる。

次年度以降、このような事態に陥らないためにも、以下の方針を掲げてコーチングしていきたい。

(1) チーム力を上げる
(2) ミスしない演技の考案

3. チームミーティングの方法（ワールドカフェ）

八百則和

1）ワールドカフェとは

Juanita Brown（アニータ・ブラウン）氏と David Isaacs（デイビッド・アイザックス）氏によって，1995 年に開発・提唱された。当時二人が，経営に携わるリーダーたちを自宅に招いて話し合いの場を設けたが，その時にゲストたちがリラックスした状態で話し合いを行えるように，様々な工夫を凝らした結果，創造性に富んだ会話を行うことができたことが始まりである。

2）目的

(1)全員に自由に意見を言ってもらいたい
(2)いつもと違う雰囲気で話し合いたい
(3)多くの知恵や考えを集めたい
(4)考えや認識を深めたい
(5)新たな気づきを得たい
(6)相互理解を進めたい
(7)お互いの関係性の質を高めたい

3）ルール

(1)グループ内で全員が話すようにする
(2)ディスカッションではないので,批判的な発言はしない
(3)たくさん質問をして掘り下げる
(4)正解はなく、間違いもない。一人ひとりの発言が誰かの気づきや新たな視点の発見に繋がる
(5)リラックスして話す
(6)はじめにアイデアや思いついたことを書く

4）ミーティングの流れ

(1)グループ内でテーマについて話す【15 分】
(2)グループから離れ，他のグループの話を聞く【10 分】
(3)元のグループに戻り,他のグループの意見を仲間に伝える【5 分】
(4)自分たちの意見をまとめる（意見を集約する【5 分】
(5)発表する【１～２分】

5）効果

(1)目的はグループ内で情報を共有することができる
(2)情報や知識を増やすことできる
(3)情報や知識をまとめ,共通理解を図ることができる
(4)一人が話すのでなく,すべての人の意見を聞くことができる
(5)全員が参加している場を作ることができる

4. 第 23 回ハンドボール女子世界選手権ドイツ大会の活動報告

嘉数陽介・田村修治

1）はじめに

2020 年オリンピックの東京開催が決定し、ハンドボール競技は、これまで同様オリンピックの正式種目として採択され、日本チームの開催国出場枠も決定している。さらに 2019 年には、第 24 回ハンドボール女子世界選手権大会を日本で開催することが決定しており、日本代表女子チームは東京オリンピックのみならず、世界規模の大会を自国開催で経験する機会を得た。

図１　第 23 回ハンドボール女子選手権組み合わせ

本報告は、ハンドボール日本代表女子チームが、次回２年後に自国開催を控えた中で出場した第 23 回ハンドボール女子世界選手権ドイツ大会における、取り組みと結果の実践報告をおこなった。

2）大会戦略

（1）グループリーグ対戦国および過去の実績

【GROUP C】

a）初戦　ブラジル・・2013 年セルビア世界選手権金メダル獲得リオオリンピック 5 位

b）2 戦目 デンマーク・・アトランタ・シドニー・アテネオリンピック 金メダル獲得

c）3 戦目 モンテネグロ・・2012 年欧州選手権 2 位 ロンドンオリンピック 金メダル獲得

d）4 戦目 ロシア・・リオオリンピック 金メダル獲得

e）5 戦目 チュニジア・・アフリカ大陸 2 位

※決勝トーナメント進出：4 枠

（2）事前の対戦国対策

前述のように、世界ランキング 19 位（開催時）の日本にとって非常に厳しいグループリーグの組み合わせとなった。これに対し日本チームは、勝算を計った上で、確率の高い相手に絞って対策をおこなった。大会までの強化合宿およびトレーニングマッチにおいて、最も時間をかけて対策に取り組んだのは初戦の相手ブラジルで、次に３戦目のモンテネグロであった。5 戦目のチュニジア戦においては対策を全くせずに２カ国の対策に注力し、これら３戦に勝利してグループリーグを突破

GROUP A	GROUP B	GROUP C	GROUP D
ANG	ARG	BRA	CHN
ESP	CZE	DEN	CMR
FRA	HUN	JPN	GER
PAR	NOR	MNE	KOR
ROU	POL	RUS	NED
SLO	SWE	TUN	SRB

図２　大会前の強化スケジュール

する戦略で準備に取り組んだ。

3）結果

（1）グループリーグ 2 勝 2 敗 1 分　３位通過

△日本 28 － 28 ブラジル、

●日本 18 － 32 デンマーク、

○日本 29 － 28 モンテネグロ、

●日本 28 － 29 ロシア、

○日本 31 － 13 チュニジア

（2）決勝トーナメント（ベスト 16）

●日本 24 － 26 オランダ、 最終順位 16 位

4）成果および課題

（1）成果

a）スペースを活用した攻撃

・孤立を狙った１対１

・アウト（特に Wing）の有効活用

・ユニットプレイ

b）シュート成功率（特に Wing）

c）7 人攻撃の有効活用

d）機動力を活かした守備

e）GK セーブ率

（2）課題

a）クローズな守備に対する解決能力

・テクニカルミス

・Pivot の活用

b）速攻占有率

・攻守 2 枚替も影響

c）コンタクト負けしないフィジカル

・大型 Pivot への対応

5. 状況から組み立てる戦術～ブロックについて～

小澤翔・藤井壮浩・下山唯

1）負けないバレーと勝つバレー

（1）負けないバレー

相手からのサーブを正確にセッターに返し，コンビネーションを確立することによって，サイドアウトを確実にとる。サイドアウトを確実にとることによって連続失点をふせぐ。

（2）勝つバレー

自チームからのサーブ時に，ブレイクすることで連続得点を多く獲得する。ブレイク率を上げることは勝率を上げることにつながる。

2）ブロックについて

バレーボール競技（以下「バレーボール」と略す）におけるブロックは，相手の攻撃決定率を減少させるための技術として挙げられている。現代のバレーボールにおけるブロックの効果は，シャットアウトする，ワンタッチをとる，レシーブコースの限定があげられる。

本学男子バレーボール部が 2017 年度に実施したブロックの取り組みは以下の通りである。

3）ブロックの基本的な型

・リードブロック

相手セッターからトスがあがったのを確認して，全ての攻撃に対応する

⇒様々な攻撃に複数枚で対応可

→速い攻撃に弱い

・コミットブロック

相手スパイカーのタイミングに合わせてブロックを行う。

→特定のスパイカーにマークを絞り，プレッシャーをかける

→トスを分散された場合，手薄になる

4）トータルディフェンス

トータルディフェンスは，相手側の攻撃をブロック，レシーブを駆使していかに阻止するかであり，重要な戦術の一つである。ブロックの目的はシャットアウトする，ワンタッチをとるであるがレシーブとの関係性を築いてこそ大きな効果が発揮される。

5）まとめ

球技において選手に求められることは，変化する状況に応じてプレーを選択することである。どんなに反復練習，試合を想定した練習をしても試合ではマニュアル通りにはいかないことが多々ある。今後は状況に応じたプレーを選択し味方に有利で相手に不利な状況を作り出すことが必要になる。

Ⅲ　引用文献

1）小澤翔・栗山雅倫・小西康人・嘉数陽介・後藤太郎・花岡美智子・植村隆志・今川正浩・八百則和・西村一帆（2017）スポーツ戦術プロジェクト研究会報告 2017．東海大学体育学部紀要，47，pp. 45-52